

# 無気力状態測定尺度の再検査信頼性 —大学生を対象とした縦断調査による検証—

長内 優樹 (東京未来大学モチベーション行動科学部 非常勤講師)

本研究では、無気力状態測定尺度の再検査信頼性を検証することを目的とした。大学生を対象に全3回の縦断的質問紙調査を行なった。分析対象者 (n=85) の回答の級内相関係数をもとめた結果、十分に高い値が得られた。また、調査時期ごとにクロンバックの $\alpha$ 係数をもとめた結果、全3回とも十分に高い値が得られた。以上のことから、再検査信頼性および内的整合性の観点から、無気力状態測定尺度の信頼性が確認された。しかし、因子構造を確認するために行なった確認的因子分析においては、各調査時期ともに適合度指標が十分な値ではなかった。このことから、因子の妥当性については課題が残る。

キーワード：無気力状態測定尺度、再検査信頼性、級内相関係数、内的整合性、縦断データ

## 問題

心理学における無気力に関する研究は学習性無力感理論を背景にもつものと、スチューデント・アパシー理論を背景にもつものに大別できる。後者はWalters (1961) によりスチューデント・アパシーの概念が提唱された後、日本において独自の発展を遂げてきた (レビューとしては、下山、1996; 下坂、2002)。そのうち実証的な研究の多くは無気力を抑うつとみなすのか、それとも学業への領域固有的な意欲の低下を特徴としたスチューデント・アパシーという独自の単位とみなすのかなどを争点に概念に混乱がみられる状況が続いてきた。しかし、近年においては、狩野・津川 (2011) が大学生の示す無気力について縦断的な調査研究を行い、持続的に学業に対して無気力を呈する群は、持続的に抑うつを伴う群 (抑うつ無気力群) と伴わない群 (スチューデント・アパシー的無気力群) に分類できることを示すなどの進展がみられる。それに加えて、上述してきたような抑うつやスチューデント・アパシーのように無気力を病的または学業的側面のみ限定した概念としてではなく、生活全般において日常的に知覚されるものとしてとらえる研究もみられるようになってきている (例えば、下坂、2001; 高山、2006)。そのような研究の背景には、たとえ学業領域に限定された無気力が病的または不適応的であるとしても、その理解のためには、まずは不適応的ではなく日常的にみられる無気力についての研究が必要であるとする考えがある。こうした研究は自己記入式の心理尺度を用いた調査研究として行なわれることが多く、新規の尺度も複数作成されている (レビューとしては、長内、2012)。

意欲低下の領域を学業領域に限定せず、生活領

域全般に対する日常的な無気力を測定することを意図して作成された尺度には、下坂 (2001) による無気力感尺度、高山 (2006) による無気力尺度、長内 (2011) による無気力状態測定尺度があげられる。

無気力感尺度 (下坂、2001) は、「私を本当に理解してくれる人は少ないと思う」、「私の周りの人たちは面白みにかけると思う」といった無気力の原因にはなることがあると考えられるが、無気力な状態そのものを示すとは考えにくい項目が含まれている。無気力尺度 (高山、2006) は無気力とはどのようなものか、どのようなとき無気力になるか、という観点で項目が設定されている。後者のどのようなとき無気力になるかは下坂 (2001) と同様に無気力の原因となる可能性がある項目であるといえる。それに対して無気力状態測定尺度 (長内、2011) は無気力を知覚している際の認知・行動的状态像に焦点化して項目を設定しており、無気力な状態の程度の測定を意図している。

無気力状態測定尺度 (Perceived Apathy States Scale) は、大学生 (n=403) を対象に作成され、無気力に悩む大学生の状態を把握するためなど将来的に臨床場面への応用を考慮し項目数は少なく、なおかつ各下位尺度が同じ項目数で構成された簡易なものとすることを目指した。その結果、本尺度は“非活動的”、“不本意”、“先延ばし”の3つの下位尺度を有しそれぞれ5項目ずつで構成されており (Table 1)、多面的に大学生の無気力状態を測定可能であるとしている。尺度の信頼性は $\alpha$ 係数による内的整合性が検討されており、充分であると判断されている ( $\alpha=.81$ )。下位尺度ごとには、非活動的 ( $\alpha=.81$ )、不本意 ( $\alpha=.79$ )、先延ばし ( $\alpha=.75$ ) であることが報告されている。ただし、因子構造については安定しないことが後の研究によって指摘されている (長内、2013a)。また、尺度の妥当性については、検討されていないこ

とが課題である(長内, 2001)、としているが、長内(2013b)により大学生( $n=97$ )を対象にした調査において無気力感尺度(下坂, 2001)との間に中程度の相関( $r=.611, p<.001$ )がみられることが報告されており併存的妥当性が示されていると解釈できるが、いずれにせよ無気力状態測定尺度の信頼性と妥当性は十分に検討されているとはいえない。

Table 1 無気力状態測定尺度の項目

<b>下位尺度 1 : 非活動的</b>
家でだらだらしていることが多い
無意味なことをして一日を過ごしてしまうことが多い
誰にも会いたくなくなって家にこもっていることが多い
何もせずにテレビなどを見ていることが多い
病気でなくても休日にずっと寝てしまうことが多い
<b>下位尺度 2 : 不本意</b>
興味のないことをやらされていることが多い
つまらない話を聞かされるが多い
嫌いな人と会わなければならないことが多い
やっていることが面白くないと感じることが多い
目上の人に命令されて行動することが多い
<b>下位尺度 3 : 先延ばし</b>
やれば出来ることだから、と先延ばしにすることが多い
明日になればやる気になるだろう、と思うことがよくある
やらなければならないと思っても、気分がのらないことが多い
やる事が多すぎて、何から手をつけていいのかわからないことが多い
何かにつけ面倒くさいと思うことが多い

尺度や検査において、信頼性が低ければ妥当性もまた低くなるという観点において信頼性は妥当性よりも優先すべきものである。そのため、同一個人内での回答の一貫性(内部一貫性)を示すが、項目数が多ければその値が高くなるという特徴を持った $\alpha$ 係数による内的整合性のみでは信頼性の検証は充分とはいえないだろう。したがって、再検査法を用いて同一個人を反復して測定したときに同じ結果がえられる程度(再現性・安定性)についても検討する必要がある。そこで、本研究では大学生を対象に縦断的な調査を行い、再検査信頼性を検証する。その際、サンプルサイズに依存せず集団内のデータの類似性を評価できる級内相関係数(Intraclass Correlation Coefficient: ICC)を用いることとする。

## 目的

本研究では大学生を対象に再検査法を用いて無気力状態測定尺度の縦断データを収集し、確証的因子

分析による因子構造の検討の後、クローンバックの $\alpha$ 係数による内的整合性の検討および級内相関係数による再検査信頼性の検討により尺度の信頼性の検証を行うことを目的とした。

## 方法

### 手続き

関東圏内の私立大学2校の講義時間を利用して学生に協力を要請し、縦断的質問紙法を用い、全3回の調査を実施した。調査間隔は4週間であり、第1回(Time 1)は2013年4月下旬、第2回は(Time 2)は5月下旬、第3回(Time 3)は6月下旬に実施した。

調査は本研究の目的とともに学業への領域固有的な無気力(いわゆる、スチューデント・アパシー)と抑うつによる無気力の弁別性の検討を行なった狩野・津川(2001)の追試も目的としていたため、複数の尺度から構成される質問紙を用いた。後述する無気力状態測定尺度、意欲低下領域尺度、Depression and Anxiety Scaleは3回を通して実施し、Time 1およびTime 2には自由記述回答形式の設問が1問ずつ実施された。

実施回数を3回、またその間隔を4週間とした理由は狩野・津川(2011)と同様に持続的な無気力、また抑うつ気分を捉えることができ、かつ調査協力者の負担とならない回数として3回を設定した。また調査間隔についても狩野・津川(2011)に倣い、1週間であれば短期的な無気力や抑うつ気分しか捉えられず、また反対に数ヶ月、間隔を開けてしまえば無気力や抑うつ気分の変動を捉えきれない可能性が高まると考えたため4週間と設定した。加えて、フェースシートには生年月日の記入欄を設けデータの照合に利用した。

### 倫理的配慮

回答依頼時に調査の論旨と参加における任意性およびプライバシーの保護について文章と口頭で説明した。

### 調査参加者

一般大学生で3回の調査のいずれかに参加し、質問紙に回答した117名のうち、3回の調査における質問紙の項目すべて(自由記述回答形式の質問を除

く)に回答に不備の認められなかった85名を分析対象とした。性別の内訳は男性29名、女性56名であり、各学年の分布は、1年生66名(男性24名・女性42名)、2年生18名(男性4名・女性14名)、3年生1名(男性1名・女性0名)であった。

### 質問紙尺度

(a) 無気力状態測定尺度(Perceived Apathy States Scale; 長内, 2011): 無気力を知覚している際の認知・行動的状态を測定する尺度で全15項目からなる。下位尺度に“非活動的”、“不本意”、“先延ばし”(それぞれ5項目)がある。教示は“以下の各項目はあなたの現在の状態にどの程度あてはまりますか。○をつけてお答えください。”とし、回答方法は“全くあてはまらない—あてはまらない—ややあてはまらない—ややあてはまる—あてはまる—かなりあてはまる”の6段階評定で1—6点を与え、無気力状態の程度が強いほど得点が高くなるように設定した。得点の範囲は15—90である。

(b) 意欲低下領域尺度(Passivity Area Scale; 以下PAS; 下山, 1995): アパシー傾向測定尺度(鉄島, 1993)の短縮版であり、大学生の学業に関する各領域における意欲低下を測定するもので、全15項目からなる。下位尺度に“学業意欲低下”、“授業意欲低下”、“大学意欲低下”(それぞれ5項目)がある。教示は“以下の各項目はあなたの現在の状態にどの程度あてはまりますか。○をつけてお答えください”とし、回答方法は“あてはまらない—ややあてはまらない—どちらともいえない—ややあてはまる—あてはまる”の5段階評定で、1—5点を与え、意欲の低下が著しいほど得点が高くなるように設定した。得点の範囲は15-75点。本研究においては、分析の対象からは除外した。

(c) Depression and Anxiety Mood scale (以下、DAMS; 福井, 1997): 抑うつと不安の関係性を説明するための認知行動モデルの構築を目的として、福井(1997)によって作成された。DAMSは、“抑うつ気分”と“不安気分”と“肯定的気分”を表現する形容詞、形容動詞、形容詞句から構成されており、それぞれを3項目(計9項目)ずつで測定することが可能である。回答方法は、“以下のそれぞれの項目について、あなたのここ2、3日の気分にあてはまるかどうか○をつけて、お答えください。”とする教示で、“まったくあてはまらない—あてはまらない—ややあてはまらな

い—どちらともいえない—ややあてはまる—あてはまる—非常によくあてはまる”の7段階評定で1—7点を与えた。得点の範囲は9—63であり、尺度全体での得点を算出する場合には“肯定的気分”を構成する3項目の得点を逆転させ、得点が高いほどネガティブになるようにした。本研究においては分析の対象からは除外した。

## 結果

### 因子構造の検討

各下位尺度の5項目ずつの尺度構成の因子的妥当性を確認するために調査時期別に確認的因子分析を行なった。その結果、Time 1においては、“非活動的”と“不本意”、“非活動的”と“先延ばし”、“不本意”と“先延ばし”の間に.63~.76の相関を仮定し、下位尺度ごとに潜在変数が5つの観測変数へ有意なパス係数を示したモデルにおいて、十分な適合度指標は得られなかった( $\chi^2(87) = 161.616, p < .001, GFI = .799, AGFI = .723, RMSEA = .101$ )。Time 2においても“非活動的”と“不本意”、“非活動的”と“先延ばし”、“不本意”と“先延ばし”の間に.62~.75の相関を仮定し、下位尺度ごとに潜在変数が5つの観測変数へ有意なパス係数を示したモデルにおいて、十分な適合度指標は得られなかった( $\chi^2(87) = 158.978, p < .001, GFI = .808, AGFI = .735, RMSEA = .099$ )。最後にTime 3では、“非活動的”と“不本意”、“非活動的”と“先延ばし”、“不本意”と“先延ばし”の間に.74~.83の相関を仮定し、下位尺度ごとに潜在変数が5つの観測変数へ有意なパス係数を示したモデルにおいて、十分な適合度指標は得られなかった( $\chi^2(87) = 173.352, p < .001, GFI = .784, AGFI = .702, RMSEA = .109$ )。

### 内的整合性の検討

内的整合性を検討するため、Time1-3それぞれについて尺度を構成する全15項目での $\alpha$ 係数をもとめた(Table 2)。

Table 2 各調査時期の $\alpha$ 係数

Time 1	Time 2	Time 3
.875	.910	.912

## 再検査信頼性の検討

Time1-3の尺度得点の平均値と標準偏差をTable 3に示す。再検査信頼性を検討するため、Time1-3の信頼性係数として級内相関係数をもとめた結果、 $ICC=.882$  ( $p<.001$ )であった。

Table 3 各調査時期の平均(標準偏差)および信頼性係数(ICC)

平均値(標準偏差)						信頼性係数
Time 1		Time 2		Time 3		ICC(1,3)
50.082	(12.298)	52.435	(13.196)	52.388	(14.039)	.882***

\*\*\*  $p<.001$

## 考 察

本研究は無気力状態測定尺度の再検査信頼性を検証することを目的とした。3回の縦断的な調査による級内相関係数が.882であったことから(Table 3)、高い再検査信頼性があるといえ、時間的安定性を有していると判断できる。また、調査時期ごとにクロンバックの $\alpha$ 係数をもとめた結果、全3回とも十分に高い値が得られた。以上のことから、再検査信頼性および内的整合性の観点から、無気力状態測定尺度の信頼性が確認された。ただし、因子構造を確認するために行なった確認的因子分析においては、各調査時期ともに適合度指標が十分な値ではなかった。このことから、因子的妥当性については先行研究(長内、2013a)の結果を支持し、依然として課題が残る。

また、信頼性のみではなく尺度の妥当性についても検討が必要である。本調査で得られたデータからはTime1,2,3において平行実施された意欲低下領域尺度(下山、1995)との併存的妥当性を検証することが可能である。意欲低下領域尺度は大学生の学業に関連する領域の意欲を問うものであるため、領域全般的な無気力を測定することを目的とした無気力状態測定尺度との相関は中程度にとどまることが予想される。

最後に、尺度の選択肢と項目の有効性、大学生に有効に機能する否かについては項目反応理論(item response theory)に基づく分析を行い確認することも必要であろう。

## 引用文献

- 福井 至(1997). Depression and Anxiety Mood Scale (DAMS)開発の試み 行動療法研究,23(2),83-93.
- 狩野武道・津川律子(2011). 大学生における無気力の分類とその特徴 —スチューデント・アパシーと抑うつとの視点から— 教育心理学研究,59,168-178.
- 長内優樹(2011). 無気力状態測定尺度の作成の試み 応用社会学研究(東京国際大学大学院社会学研究科),21,47-53.
- 長内優樹(2012). 無気力自己記入尺度 応用社会学研究(東京国際大学大学院社会学研究科),22,85-91.
- 長内優樹(2013a). 大学生を対象とした無気力状態測定尺度の因子構造の安定性の検討 応用社会学研究(東京国際大学大学院社会学研究科),23,75-82.
- 長内優樹(2013b).自己記入式無気力尺度の比較の試み 日本応用心理学会第80回大会発表論文集,38.
- 下坂 剛(2001). 青年期の各学校段階における無気力感の検討 教育心理学研究,49,305-313.
- 下坂 剛(2002). 無気力研究の心理学的展望 人間科学研究(神戸大学発達科学部人間科学研究センター),9(2),87-96.
- 下山晴彦(1996). スチューデント・アパシー研究の展望 教育心理学研究,44,350-363.
- 下山晴彦(1995). 男子学生の無気力の研究 教育心理学研究,43,145-155.
- 鉄島清毅(1993). 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— 教育心理学研究,41,200-208.
- 高山草二(2006). 無気力と無力感 動機の期待×価値理論からの分析 島根大学教育学部紀要,39,45-53.
- Walters, P. A. Jr. (1961). Student Apathy, Blaine, G. B. Jr. & McArthur, C. C. (ed) Emotional Problem of the Student, Appleton-Century-Crofts, 153-171.

(受稿2015年1月10日 受理2015年1月30日)

---

## **Test-Retest Reliability of Perceived Apathy States Scale Verification Using Longitudinal Surveys on University Students**

Yuki OSANAI (The school of Motivation and Behavioral Sciences, Tokyo Future University)

The purpose of this study was to verify the test-retest reliability of a perceived apathy states scale. Three longitudinal survey studies of university students were conducted. Intraclass correlations were computed using data from the survey respondents ( $n = 85$ ), and the correlations were found to be sufficiently high. Cronbach's  $\alpha$  coefficients were also computed and the values were found to be sufficiently high for each of the three surveys. These results confirm that the scale is reliable in terms of both test-retest reliability and internal consistency. However, confirmatory factor analysis, which was performed to verify the factor structure, resulted in a less than satisfactory value for the goodness-of-fit index. This suggests that some problems remain regarding factorial validity.

Keyword: perceived apathy states scale, test-retest reliability, intraclass correlation coefficient, internal consistency, longitudinal survey